

氏 名	渡部 みさ
-----	-------

(論文内容の要旨)

本論文は、現代における心理臨床の実践である心理療法・カウンセリングが、さまざまな人間の営みの場において多様で多層的な在りようを見せている状況を鳥瞰的に着目しつつ、心理臨床実践には不可欠となる、ひとりの人間存在としてのクライエントの変容を護る〈場〉をいかにして創出できるのかという着想から出発している。そして、そのための実践的な創意工夫について、教育機関における豊富な事例に基づいて論じたものとなっている。

論文は、序章を含む全6章から以下のように構成されている。まず、著者の問題意識を明確にして論文全体を俯瞰する「序章」から始まっている。続く第1章「心理臨床の〈場〉と現場における実践および研究の展開」では、教育機関における心理臨床実践及びその展開が先行研究のサーベイを行いながら紹介され、本論文の位置が明確化されている。次いで、第2章「教育機関における心理臨床の〈場〉」では、教育機関の制度的側面によって規定される学校という営みの「場」が、心理臨床の〈場〉として機能していく在りようが、初等・中等教育機関と高等教育機関それぞれの制度的側面の特徴を踏まえて論じられている。さらに第3章「発達臨床的視点から見た心理臨床の〈場〉」では、発達臨床的視点に立って、人生前半の発達の節目である「思春期」と関連して創出される心理臨床の〈場〉について論じられている。そして、本論文の中核となる第4章「内的な〈場〉、その生成と更新」では、心理臨床の〈場〉の生成に本質的に関わってくる心理臨床家の内的営みという視点から、教育機関における心理臨床実践における創意工夫について論じられている。最終の第5章「全体考察と展望」では、これまでの論述を整合的にまとめあげて今後の展望が論じられている。

まず序章では、本論文が著者の長年に渡る教育機関における心理臨床の実践を基盤にして心理臨床の〈場〉について論じられることと、その際の論述は心理臨床学が伝統的に採用してきた心理臨床実践における心理臨床家とクライエントとの関係の在りようを通してもたらされた臨床的事実を記述・検討する「心理臨床事例研究」のスタイルを踏襲することという、著者の位置が明確に示されている。

第1章では本論文の中心概念である〈場〉についての定義が述べられている。心理臨床実践が関与する場は物理的な場と心理的な場に大別されるが、前者はさらに物理的な環境として実体的にその実践に影響を与える場と、教育機関の設立趣旨や制度の規定という枠組みによってその実践に影響を与える場に分けられる。著者は、心理的な場すなわち心理臨床家とクライエントとの出会いを通して生成される心理的なしは内的な場を〈場〉と定義する。そして、かかる〈場〉の議論の前段として、教育機関とその「場」における心理臨床の近年の展開過程が初等・中等教育機関と新制大学設置以降の高等教育に分けて手堅くまとめられている。次いで、それらを踏まえて教育機関における「心理臨床事例研究」という視点や心理臨床実践の対象の広がりについて近年の動向がまとめられ、本論文で心理臨床の〈場〉の生成について「心理臨

床事例研究」の視座から論じることの意義が明確に述べられている。

第2章では、まず遊戯療法事例を取り上げ、物理的環境としての「場」が心理臨床の〈場〉として機能していく様相が記述・検討されている。続いて、初等・中等教育機関、高等教育機関の順に、それぞれの制度的側面によって規定される「場」の特徴と、それが心理臨床実践の〈場〉として機能していくための臨床的な発想と工夫について論じられている。その際に、心理臨床実践が心理臨床家個人による実践だけではなく、教職員とともに活動する在り方についての臨床的工夫が強調されている。

第3章では、発達臨床的な視点に立って、人生前半の発達の節目である「思春期」が取り上げられ、思春期において生じるさまざまな心理的テーマが、学校という「場」を心理臨床実践の〈場〉として機能させていく可能性をもつものであることが事例をもとにして論じられている。次いで、思春期を過ぎたクライアントが過去の思春期体験を語るという事例を通して、心理臨床実践の〈場〉における語りの特徴について論じられ、最後に思春期さなかを生きる人間にとって心理臨床の〈場〉がもつ特徴について論述されている。

本論文の中核となる第4章では、心理臨床実践を深めていく面接上の工夫として、「関係」という視点が暗々裡に導入されている。すなわち著者は、教育機関においては、心理臨床の〈場〉をクライアントと共に更新し続ける試みとして、描画法とくに風景構成法の有効性を論じながら、心理臨床の〈場〉は、心理臨床実践の本質的要因である心理臨床家とクライアントとの関係によって内的に生成されるのであり、そうした内的な生成が維持・更新されるための工夫として、風景構成法などの描画法の有効性を論じている。描画法には、心理臨床家とクライアントの関係に介在する第三のものとしてイメージを活性化させる効果があるが、そうしたイメージの有効性についても論じられている。こうした論述は、心理臨床の〈場〉の生成に必要な、面接における関係の重要性を示唆したものでもある。さらに、このような観点から継続面接における風景構成法の描画変化を量的に分析した調査結果に基づいて、心理臨床の〈場〉の生成と更新にとって描画法が果たす有効性について考察されている。

最終の第5章では、以上の研究において得られた知見がまとめられ、「場」における心理臨床の汎化と心理臨床の〈場〉の深化、人生周期と心理臨床の〈場〉、心理臨床の〈場〉と心理臨床における「関係」、「場」の固有性と〈場〉の普遍性といった視点から全体的考察がなされ、心理臨床の〈場〉は、関係の一回性を大切にしつつ関係によってさらに更新されていくと結論づけられている。

氏 名	渡部 みさ
-----	-------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、長年に渡って教育機関で心理臨床実践を積み重ねてきた著者が、その経験を通して着想した心理臨床の〈場〉という視角を「心理臨床事例研究」という方法によって論じたものである。取り上げられた教育機関は、初等・中等教育機関から高等教育機関までと幅広く、それぞれの教育機関における著者自身の臨床実践事例を素材として心理臨床の〈場〉の生成に与る心理臨床家の創意工夫が論じられている。教育機関における心理臨床の実践という領域においては過去に例を見ない体系的な論文と言うことができ、この点で出色である。また、心理臨床の〈場〉という視角は心理臨床家の臨床観によってさまざまな論点があり、本質的テーマでありながらその扱いに慎重さを必要とするため、正面からこのテーマを取り上げた研究はまだない。この意味で、本論文はこのテーマに果敢に取り組んだ先駆的な研究と評価することができる。

著者の発想は、教育機関における物理的環境や制度などの規定によってもたらされる「場」が、「場」それ自体としては心理臨床的には機能しないという実践体験からもたらされている。そして著者は、物理的環境や制度などの規定を変えていくこと、すなわち心理臨床の外側からの変更によって心理臨床的な機能を果たす場を創り上げようとするのではなく、このような「場」が心理臨床的に機能するための心理臨床家の創意工夫がもっとも重要であると認識していることが論文の随所に見て取れる。こうした姿勢それ自体がきわめて心理臨床的であると言えることができる。

初等・中等教育機関に心理臨床家が参入する試みは1995年から開始されたが、スクールカウンセラーの役割・活動については肯定・否定を含むさまざまな議論がなされてきた。本論文はそうした議論に対し、著者なりのひとつの答えを提示している点で高く評価できる。

まず著者は、第1章において教育機関という心理臨床家に与えられた場の特徴を初等・中等教育機関、高等教育機関それぞれの機関の歴史的変遷を踏まえながら教育という観点から理解する必要性を謙虚に論じている。それによって、教育機関の特徴とそこに心理臨床実践が参入した経緯が的確に把握されている。こうした理解を踏まえた上で心理臨床実践が教育機関で成立する可能性を探究することができるかと著者は考えている。こうした観点は必要不可欠であるけれども、多くの場合、スクールカウンセラーにとっては等閑視されたり、心理臨床の専門性が主張されるだけという段階にあるのが実情である。本論文は、こうした状況に着実な方向性を提示している。

また、この姿勢は第2章において「心理臨床事例研究」に引き継がれている。そこでは教育機関において心理臨床の位置づけを模索する著者の在りようが、教職員と共に活動するための工夫として根づいていく様相が事例を通して理解できる。事例それ自体はクライアントとの関わりの記述であるが、決して心理臨床の

専門性の内に留まるのではなく、そこに学校という場における教育という視点の必要性を強くうかがうことができるからである。

このように著者は、教育機関における心理臨床実践という専門性の主張の前に、当該の児童・生徒及び保護者にとって必要な関わりは何であるのかを見立て、必要に応じて学校現場で活動するさまざまな職種と連携をとりながら活動することの重要性を記述し、そうした姿勢によってはじめて心理臨床の〈場〉が創出されてくるのであると論じている。すなわち、心理臨床の〈場〉の創出には心理臨床家の姿勢が重要な要因になると指摘しているのである。これは、スクールカウンセラーなど教育機関で活動する臨床心理士にひとつのモデルを提供するものと言うことができる。

けれども、こうした姿勢が強く打ち出されすぎると心理臨床の専門性が希薄化する危険性も生まれてくる。これに対して著者は、論文後半とくに第4章において、心理臨床の専門性の維持・更新の必要性を強調している。そして、さまざまな工夫を通して教育機関という「場」を心理臨床の〈場〉に生成すること、それによって心理臨床的に意味のある継続面接を機能させることが可能になることを論じている。その工夫のひとつとして風景構成法をはじめとする描画及び「物語」というイメージの有効性を論じている。そして、心理臨床の実践を通してクライアントの変容に携わる心理臨床家がクライアントの変容を護る器として機能するために、心理臨床の〈場〉の創出が必要であると論じている。これは、相談室などの外的な枠ではなく、心理臨床家とクライアントの関係によってもたらされる「内的な枠」と言い換えることもできるであろう。

著者の今ひとつの的確な姿勢は、発達臨床的視点を取り入れているところにある。教育機関で人生の一時期を送る児童・生徒は「思春期」あるいはその前後の発達の時期にある。著者は第3章において、クライアントの語りを思春期との関連で論じ、思春期を経過したクライアントが過去の思春期体験を語ることを通して内なる思春期としてその体験を納め直していく作業の重要性や思春期のただなが「移行期」として大過なく切り抜けられ発達の次段階への進行が優先される傾向などを、複数の事例を提示しつつ、さまざまな教育機関の「場」において創出される心理臨床の〈場〉の特徴として捉えようと試みている。

また、本論文の特徴として豊富な心理臨床事例の提示がある。従来から「心理臨床事例研究」は、面接の過程を継時的に記述・検討するというスタイルが殆どであったが、著者の事例の取り上げ方は決してそうしたスタイルに留まらず、面接の一場面を取り上げたり、長い期間の面接過程を著者なりに物語として纏め上げたりなど、事例提示にも創意工夫がなされており、それが豊富な事例提示に繋がっている。

このように、「心理臨床事例研究」というスタイルで、いわば事例をもって語らしめるといふ本論文における著者の意図は明白である。けれども、事例の選択に関しては、〈場〉というテーマとの関連でその方法により一層の工夫を必要とすること、著者の〈場〉を論じるスタンスそれ自体に揺れが見られること、心理臨床の専門性の希薄化という点での考察に一層の深化が必要であること、などの

問題点もあり、これらは口頭試問において議論された。その議論を通して、これら問題点は、本論文の価値を減じるものではなく、著者の今後の課題となるものであることが確認された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 20 年 6 月 3 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。